おもしろく心ゆき、いのちのぶるほどなり、殿の中將の君、内の大殿の公達、そこらにすぐれてめやすく花やかなり、はの〳〵と明行に、ゆきや、ちりて、そゞろさむきに、たけかはうたひて、かよれるすがた、なつかしき聲々の、繪にもかきとめがたからんこそくちおしけれ、御かた〳〵いづれもいづれもおとらぬ袖ぐちども、こぼれいでたるこちたさ、もの、いろあひなども、あけぼのの、そらに、春のにしきたち出にける霞のうちかとみわたさる、あやしく心ゆくみものにぞありける、さるはかうこじのよばなれたるさま、ことぶきのみだりがはしき、をこめきたることも、ことごとしくとりなしたる、中々なにばかりのおもしろかるべきひやうしも聞えぬ物を、例のわたかづきわたりてまかでぬ、夜あけはてぬれば、御かた〳〵かへりわたり給ぬ、

〔年中行事歌合〕八番　右　踏歌節會同十四日十六日　貞世

このとの、ころゐさへすめる雲ゐかなかざしのわたの玄ろき月よに○中略

右踏歌節會は、正月十四日男踏歌の事にて侍るべし、此ころおこなはれ侍るは、女踏歌十六日なり、いづれもおなじ事なれば、題の心にもそむくべからず、彼ひかる源氏の物がたりなどにも、男踏歌のことおほくは申侍り、大方みやこの遊士の、こゐよく物うたふをめして、としのはじめのいはゐのこと葉をつくりて、まひをまはせられけるなり、されば十四日十六日は月のころなれば、明月に踏歌のきよくを、御覽じけるなるべし、このとのといふは、踏歌にうたふ歌の曲なり、かざしのわたといへるは、かふりにわたをまきて、かざしにもちひたるなり、たかこじなど、源氏にいへるもこの事なり、

踏歌後宴

〔西宮記正月下〕後宴○踏歌　二三月間

○按ズルニ、踏歌後宴ノ時ニ賭射ヲ行フ事ハ、武技部賭射篇ニ載セタリ、

〔日本紀略一醍醐〕延喜五年三月廿九日、踏歌後宴、御賭、左大臣○藤原時平以下奉貢物、　廿二年三月九日